

クリトリスがコンプレックスの私が  
年下部下によしよしエッチで  
溺愛されるお話

大和ソウ

【登場キャラクター】

- ・左京梨子 さきょうりこ

32歳

大手通信会社営業部部长。

しっかりもののキャリアウーマン。

彼氏が欲しいと思うものの、

体にある悩みがあって自分に自信がない。

- ・遠藤 拓人 えんどうたくと

梨子の部下。26歳。

優しく穏やかな性格。ほんわか癒し系。

梨子のことを慕っている。

\* story \*

1.私の秘密。 3p

2.秘密の関係 38p

3.一ヶ月の答え 66p

4.元彼騒動 89p

## 私の秘密

「遠藤くん、これ。付箋のところ間違ってたから修正してね。納期今日の十五時だから急いで」

ピシヤリと言いつつ。私のデスクの前に立つ部下、遠藤拓人は、落ち込むふうでもなく「承知しました」明るくと答えた。

私は現在、この会社の営業部で部長というポジションについている。三十二歳、女で異例の出世。男性陣にはやっかまれたけれど、努力してきた結果だ。

おかげで女にしてはかなりいい稼ぎだと思う。特別浪費はしないけれど、好きなものを買えなかったことはないし、人生楽しく生きている……つもりだ。

けれど、そんな私にもどうしても足りないものがある。そう、「恋人」だ。

大学の時元カレと別れてからはずっと一人。いい加減、彼氏が欲しい。

けど、私には難しいことだつて分かっている。元カレとは「ある理由」があつて別れた。それを理解されない限り、多分この先私と付き合つてくれる人なんてないんじゃないだろうか。

そんなある日のことだつた。私が部下の遠藤くんに告白されたのは。

「左京部長。僕と付き合つてもらえませんか」

飲み会の帰り道だつた。二人横並びになつて、駅までの道を歩いていた。

最初、私は遠藤くんが酔つ払つてゐるんだと思つた。お酒を飲んでいたし、上司の私に言うような言葉じゃなかつたから。

「何言つてるの。馬鹿みたいなこと言わないで」

「冗談じゃありません。本気なんです」

「飲み過ぎよ。ほら、コンビニで水でも買つてきたら？」

「左京部長、本気なんです」

遠藤くんが私の手を掴む。「ちよつと、セクハラよ」と言いたいところだけど、仲良くやつてきた部下をセクハラ男扱いしたくはない。どうしたものかと思いいながら遠藤くんの目を見つめる。

いつもは愛想良くニコニコしている彼だけど、今は真面目な顔をしている。

酔っている……わけではない、の？

「……冗談でしょう？ 私は上司よ」

「分かってます。でも、ずっと好きでした。冗談なんかじゃありません。本気で左京部長とお付き合いしたいと思っっているんです」

—— どうしよう。本当に本気みたい。

遠藤くんは朗らかで明るい、癒し系の男の子だ。営業部で目立つタイプではないけれど、人をよく観察していて、面倒見がいい。嘘を言うような子ではない。何を隠そう、彼の面接は私がしたのだから。

けれど、一体どうして私のことが好きになったのだろうか。私はお世辞にも可愛いらしいタイプではない。しつかりしていて姉御肌だと言われるが、女性らしさはあまりないと思う。遠藤くんに好かれるようなことはしていない。

「あの、どうして私のことが好きなの？ 遠藤くんなら、もっと可愛い女の子と付き合えそうじゃない」

「左京部長は十分可愛いですよ」

「な、何言ってるの」

「本当ですよ。左京部長は可愛いです。僕は、すごく好きです」

遠藤くんがにつこりと笑う。

私は思わず耳を疑った。私が可愛いなんて、あるわけない。彼の目は曇っているのだろうか。

「僕は真剣なんです。お付き合い、してくれませんか」

「……ごめんなさい。あまりにも突然すぎて、ちよつと……すぐに答えを出せないわ」

遠藤くんは年下だ。おまけに部下だ。簡単に恋愛できる相手じゃない。というか、今まで部下として接してきた人間を、いきなり男として見るのは無理だ。

「じゃあ、お試しで付き合うのはどうですか？」

「お試し？」

「はい。一ヶ月で構いません。左京部長がその間に、僕と真剣に付き合いたいと思つたら本気で付き合いますよ。そうでなければそのまま別れて構いません」

「でも……そしたら遠藤くんが……」

「大丈夫です。僕も大人ですからそれぐらいの分別はついてますよ。未練たらしくすがったりしませんし、迷惑かけるつもりもありません。だから、お願いです」

遠藤くんの真剣な告白に、私は悩んだ。

遠藤くんはいい子だからできれば傷つけない。けど、このままずっと一人だったら……と打算的な気持ちもある。妥協や保身で恋人を選ぶなんて良くないけれど、今の私には重大なことだ。

——でも、遠藤くんが本当の私を受け入れてくれる保証はない。きつとガツカリする。ううん、むしろ軽蔑されるかも……。

「左京部長？」

「……ごめんなさい。遠藤くんのごことは人間としてとても好きだけれど、私にはもつたない相手よ。私みたいな女を選んでもうまくいかなと思う」



「そんなことはありません。僕はどんな左京部長だって受け入れる自信があります。保証します」

本当だろうか……。人の言葉なんてすぐ変わる。遠藤くんも、元カレみたいに幻滅するかもしれないのに。けど、信じてみたい気持ちもある。

私はしばらく悩み、ようやく頷いた。

「……分かったわ。そこまで言うなら、付き合いましょう」

「本当ですか」

「あ、ただし会社の人々には内緒ね」

「もちろんです。正式にお付き合いするまでは誰にも言いません」

「そう……。ごめんなさいね。気を遣ってくれてありがとう」

「左京部長……。いえ、梨子さんって呼んでいいですか」

「ど、どうぞ」

「梨子さん、せっかくなので、二人で二軒目行きませんか。いいお店を知ってるんです」

どうしよう。仮とはいえ付き合うことになったんだし、ここは行っておくべきだろうか。遠藤くんとの関係がどうなるかはわからないけれど、ここでさよならするのはあまりにもそつけない対応だ。

私は快諾した。そしてそのまま、遠藤くんおすすめの店へと向かった。

\*

「ん……」

なんだか体が重たい。どうしてだろう。もしかして飲みすぎた？ 緊張してたのかな……。いい加減お風呂入らなきゃ。スーツを脱いで化粧も落とさないと……。

ぼんやりと考えながら目を覚ます。

「え……？」

目を覚まして一番に見えたのは、天井だった。驚いて飛び起きようとするが、腕が頭の上で縛られていることに気がつく。

——な、何これっ!? ど、どういうこと? ここは……っ!?

よく見れば、ここは私の部屋のベッドの上だ。いつの間に帰ってきたのだろう。ううんそんなことよりも……まさか私の部屋に泥棒が……っ!? それで拘束されて……。

「おはようございます。梨子さん」

ふと、薄暗い闇の中から聞き覚えのある声が出た。

私は目をキョロキョロと動かし、その声の人物を探す。その人物はすぐに見つかった。

「よく眠っていましたね。たくさんお酒を飲んだから、酔っちゃったんですね」

私がいとも家で仕事をしてるワークデスク。そこに、遠藤くんがいた。

遠藤くんは立ったままデスクにもたれ、私の方を緩やかに微笑みながら見つめている。

「え、遠藤くん!? どうしてここに……っ」

「梨子さんが酔ってしまったみたいなので家まで運びました」

遠藤くんはしれつと言いつつ。

「そ、そうじゃなくて……っなんでこんなことするの!？」

私の手は頭の上で縛られた状態。スーツは着たままだけれど、無防備な格好だ。

「梨子さんと仲良くなりたくて」

「なっ……ふざけないで! 今すぐ外してちょうだい!」

「それは駄目です。だって、そんなことしたら梨子さん逃げちゃうから」

遠藤くんの手が私のスカートにかかる。あつという間にめくりあげられて、ストッキングとパンティがあらわになった。

無造作にビリッ。と、ストッキングが破かれる。ベージュ色のストッキングの中心に穴が空いた。遠藤くんはそのまま、パンティまで外しにかかる。

「いやあつ！ やめて！ 離して！」

「大丈夫。乱暴したりしませんから」

——駄目！ 遠藤くんにアレが見られたら……っ。

「いやあつ！」

そして、ついにパンティまで取り去ってしまった。

「あつ……」

「ん？」

遠藤くんは丸見えになったそこを見て、驚いたように目を見開いた。

——ああ、見られてしまった。私の秘密……。

「梨子さん……これ……」

「いやあ……！ 見ないで！ 見ないでえ……！」

私には秘密があった。クリトリスが人よりも大きいことだ。

子供の頃からずっと、クリトリスが大きかった。普通にしても指の第一関節

節ぐらいの大きさがある。興奮した時はもつと大きくなった。

最初はこんなものだと思っていたけれど、思春期を過ぎたあたりから段々と気になるようになった。

そして一番初めの彼氏。大学生の時付き合った男性に見られて、私の人生は終わった。

『お前……なんでこんななんだ？ 気持ち悪いぞ』

それはとてもショックな言葉だった。生まれつきのことですらどうしようもないのを、当時の彼氏は私が遊び人だと思つたらしい。結局、その彼氏とはすぐに別れた。

けれどそのおかげで人よりも大きなクリトリスのことが気になつて、男性と付き合えずにいた。またひどいことを言われるのが怖かつたからだ。

それなのに、まさか遠藤くんに見られちゃうなんて……！

「いやあ……！ やめて、見ないでえ……！」

私は恥ずかしくて、情けなくなつて涙を流した。こんなあられもない姿を遠藤くんに見られてしまうなんて。しかもよりによつて、一番見られたくないものを。

嫌われる。軽蔑される。きつとみんなに言いふらされて、遊び人のヤリマンだつて思われる……。

「梨子さん。これ、元々こんなに大きいんですか？ 子供のペニスぐらいありますけど」

「ううっ……っ見ないで……おねがい……っ」

「ああ……泣かないでください。大丈夫です。僕はどんな梨子さんでも大好きですから」

遠藤くんの手がそつと私の頭を撫でる。

「すごく可愛いです。だから梨子さん。泣かないでください」

——可愛い？ 気持ち悪いじゃなくて？

ぎゅつと瞋っていた目を開けて、そつと遠藤くんの顔を覗く。遠藤くんはいつもと同じように微笑んでいた。ううん、なんていうか……愛しそうに私を見つめている。

「ほ……本当に？ こんなの、気持ち悪いじゃない」



「なに言ってるんですか。全然そんなことはありませんよ。こういうのは個性です。みんな同じ形じゃないですから、多少大きかったり小さかったりしても別におかしくありません」

遠藤くんに肯定されて、私はなんだかホツとした。まさか、そんなふうに言われるなんて思ってもみなかった。こんなクリトリスなんて気持ち悪いだけだと思つたから……。誰にも言えなかった。

「僕こそ、すみません。早く梨子さんと仲良くなりたくて、ちよつと焦つてました。怖がらせてしまいましたね」

遠藤くんは私を拘束していた布を解いた。どうやら、ハンカチで縛っていたらしい。

私は恐る恐る起き上がった。

——襲つてきたりしない、よね。

いくら年下とはいえ、彼は男だ。本気で襲われたら勝てない。

「大丈夫です。無理矢理はしませんよ」

「なんであんなこと……」

「……僕には一ヶ月しかありませんから。多少慌てます。もちろん、梨子さんに好きになってもらうつもりですけどね」

遠藤くんはこんなに自信のある男性だっただろうか。仕事はしっかりしていたけれど、こんな感じじゃなかったと思う。もしかして、今の彼が本物の遠藤くん……なのだろうか。

なんていうか、ちよつとSつ気がある。会社で見る彼とは違う。

「でも……残念だな。せつかく可愛い梨子さんが見れたのに」

「なつ……からかわないで！」

「からかつてなんかいませぬ。梨子さんのココ、とつても可愛いですよ」

「んっ……」

つん、と指でクリトリスに触れられる。

—— あっ、ダメ！ クリトリス反応して大きくなっちゃう！

だが、遅かった。私のクリトリスは既に勃起し、おおきく膨らんでいた。

「やっ……見ないでっ！ こんな……嫌！ 気持ち悪い！」

「隠さないで下さい。ホラ、こんなに綺麗で可愛いクリトリス、見たことありませんよ」

「あ……っ」

遠藤くんの手が閉じようとする股を止める。ぐいっとなまた脚が開かれた。

「梨子さんのクリトリス、とつても可愛いです」

ツン♥と指で触れられる。私はつい反応してビクンと震えた。

——気持ち悪いって思ってたのに……どうして？ 遠藤くんに触られる

と、なんだか……変な気持ちになる。

「ふふ、気持ちよかったですか？」

「そ……そんなんじゃない……」

「梨子さん、僕は梨子さんが好きです。だから僕を信じて、身を任せてくれませんか」

「え……」

「梨子さんは、自分のクリトリスが嫌なんですよ？ だったら、僕が好きになれるように協力します。僕のごときは好きにならなくてもいいですから、自分のことは嫌いにならないで下さい」

遠藤くんは言い聞かせるように言った。

確かに……このまま苦手意識を抱いていたら一生彼氏ができない。それどころか、結婚もできないかもしれない。そんなのは嫌だ。

「ね、一緒に頑張りましょう」

遠藤くんの笑顔に促され、私は微かに頷いた。

遠藤くんは私の秘密を知っても引かなかつた。元カレみたいに嫌がられると思つたのに……彼は嫌じゃないんだろうか。

もしかしたら。もしかしたら、遠藤くんとならうまくいくかもしれない。こんな私でも受け入れてもらえるのかもしれない。私は淡い期待を抱いた。

「本当に……気持ち悪くないの……？」

「なに言ってるんですか。そんなこと思うわけありません」

「でも……」

「……もしかして、誰かに言われたんですか？」

「……以前付き合っていた人に、言われたの。でも、私もそう思ってたし、こんなの変だつて思ってたから……」

「そんなこと言うバカがいるんですか」

一瞬、遠藤くんの表情が険しいものになる、私が驚くと、遠藤くんはいつもの表情に戻った。

「そんな見る目ない人のことなんて忘れましょう。梨子さんにはもつと相応しい人がいます」

それは、自分のことだつて言いたいのだろうか。慰めているのか、それとも自分をプッシュしているのかよく分からない。

遠藤くんはすぐく前向きだ。こんな私を見ても引かないでいてくれたし、落ち込んでばかりの私を励ましてくれる。本当に、私のことが好きなんだと思った。

「ちよつと見てもいいですか？」

「あ、あんまり見ないで……恥ずかしいから」

「すみません、つい。でも、本当に大きなクリトリスですね。僕もこんな大きなものを見るのは初めてです」

「っ……」

「ああ、馬鹿にしてるんじゃないやありません。褒めていゝんです。ちなみに梨子さん、オナニーの経験は？」

「な、ないわよ。大きくなるのが嫌だから、したことなかったわ」

「そうですか。それは勿体ないですね。もしかしたらこのクリトリスを鎮められるかもしれないのに……」

「え？」

「ホラ、興奮して大きくなつてますよね？ このまま置いていたらずっとこのままですよ。男の人だってオナニーしてスッキリするじゃないですか」

「じ、じゃあ……どうしたらいいの？」

話の流れを理解しているなら、その方法がなにか分かるはずだ。だが、私は理解できていなかった。遠藤くんとそんな話になるとは思っていなかったせいもあるし、仕事ばかりして色恋から遠ざかっていたせいもある。

けれど一番は、分かっているけど怖いからだった。

「梨子さんのココを触るんですよ」

大きくなったそこを見つめられ、私は顔が熱くなった。

「僕は一応恋人ですから、触る権利はありますよね？」

「そ、それは……」

「梨子さんが嫌がることはしません。触らないでっていうなら触りませんから安心してください。ただ、僕個人としては梨子さんに触りたいですし、苦手克服のお手伝いがしたいと思っています。どうですか？」



「……か、勝手にしたら」

「ありがとうございます」

遠藤くんはスーツのまま、私の前に来て脚を左右に割った。まだ恥ずかしくて、つい力が入ってしまう。

遠藤くんと付き合うことになったけれど、まさか突然こんなことになるとは思わなかった。

「触りますね」

さわっ……♡

「はうっ♡」

クリトリスがぶるっ♡と震えた。こんなふうに直接触られるのは初めてだ。

「うん、いい感度ですね。さあ、もう一度触りますね」

遠藤くんの手が撫でるようにクリトリスに触れる。

「あつ……♡は、あん……♡」

——クリトリスくすぐつたい♡でも気持ちいい……♡

「梨子さんのクリトリスは敏感だから、優しくしてあげないといけませんね。じゃあ、今度はこうやって……」

トンっ♡とクリトリスの先つちよを指でタップする。すごく優しいタッチだ。でも、クリトリスが敏感だからか、すぐにピクッて反応してしまう。

トンっ♡トンっ♡トンっ♡トンっ♡

「あ、遠藤く……♡や、やだ♡それ……っ」

「痛いですか？」

「い、痛いんじゃないかって……っん♡」

「気持ち悪い？ 触るのやめましょうか」

言うなりピタリと動きを止める。私はなんとか物足りなかった。気持ち悪くな  
んでない、むしろ――。

興奮したせいでクリトリスがピンと立っている。なんだかムラムラする。このま  
ま終わっちゃったら、クリトリスもこのままなの？

「すみません。無理矢理してしまつて。梨子さんのクリトリスをなんとかできたら  
と思つたんですが……嫌でしたよね」

「そんなこと……ないわ。その……」

「もう触りませんから」

……そ、そんな。もう終わりなの？ せつかく気持ちよかつたのに。

ああ、でもこのまま放つておいたら熱がおさまらない。ずっと勃起したままだつ  
たらどうしよう……。

「遠藤くん……あの……」

「どうしましたか？」

私は股をもじもじさせ、なんとか察してくれないかと願う。いきなり部下におねだりなんて出来ないし、触つて欲しいだなんて頼むのも恥ずかしすぎる。

遠藤くんの顔が近付いた。「どうしたんですか？」と、優しく言われると、私の気持ちに迷いが生じる。

「あ、の……これ……」

「クリトリス、触つて欲しい？」

その言葉に、私はおずおずと頷いた。

「気落ち悪くなかったですか？ 無理に我慢しなくてもいいんですよ」

「き……気持ち悪くはないから。だから……」

「……よかった。じゃあ、もう一度見せてください」

ほっとしたせいかな、さつきよりも簡単に脚を開いた。クリトリスは相変わらず立ち上がっている。

「多分、今すごく敏感だと思いますから、ゆつくりしますね」

そう言いながら遠藤くんは私のクリトリスに顔を近づけ、先つちよにふつと息を吹きかけた。

「……っ♥」

一瞬、ひやつとしたものを感じる。刺激はわずかだけれど十分気持ちいい。

「これは痛くない？」

「え、ええ……」

「じゃあ、これは？」

今度は指でツンツン、と突つつくように刺激する。私はまた気持ちよくてびくびく反応した。

「うん……これも気持ちよさそうですね」

「じゃあ、もつと本格的に触ってみましょうか」遠藤くんの指が私のクリトリスに伸びた。

指先が優しく、私のクリトリスを摘む。痛くはない。むしろ、触れられてピクピク嬉しそうに動いている。

「ああ……すごいな。梨子さんのクリトリス、心臓みたいにどくどく脈打ってます」

「ふ……っ♡ん、あ……♡」

「声、我慢しなくていいですよ。気持ちよかったら遠慮なく言ってくださいね」

「あっ♡♡」

今度はクリトリスの周りをクルクルと指で撫で始めた。

—— ああ、これ気持ちいい♥じわじわ刺激が伝わってきて、またクリトリス  
反応しちゃう♥

「ああ……また大きくなりましたね。勃起して苦しそうだ。梨子さん、クリトリス、舐めてもいいですか？」

「ふあ……？ あ、え……？」

「クリトリスを舐めるんです」

はつきり直接的に言われ、快感でぼうつとした頭が叩き起こされた。

遠藤くんになんかそんなところを舐められてしまうなんて、と羞恥心が湧き上がる。

「だ、駄目よ。お風呂にも入ってないし、汚いから……っ」

「平気です。指で触るより、ずっと気持ちいいですよ。クリトリスもスツキリすると思います」

ついそそのかされそうになる。甘い誘惑だ。私は迷ったけれど、本心は頷いていた。もつと触つてほしい♥クリトリスを舐めて欲しい♥

遠藤さんの舌がゆつくりとクリトリスに近づく。柔らかい舌先がちよん、とクリトリスの先端に触れた。そのままチロチロと先つぽを舐める。

「ああっ……♥だめ！ それっ……」

「気持ちいいですか？ 梨子さんのココ、ピクピクしてます」

「やだ……っん、はうっ♥つくあ……♥」

「梨子さん可愛い……たくさん気持ちよくしてあげますね」

「ひゃあっ♥あ、ああ♥だめえ♥舐めないで♥なんかヘン♥あたま、おかしくなるう♥」

「舐められるのが好きなんですネ。じゃあ、これはどうですか？」



ぱくっ♡と遠藤くんの唇が私のクリトリスに吸い付く。私はあまりの刺激に体を大きく振るわせた。

「あああああつ♡♡あ、んんん♡らめつ♡すつちやいや♡刺激、強すぎるからあ♡♡」

「すごく気持ちよさそうですよ。ホラ、梨子さんのクリトリスもこんなに大きくなってる……ちゅっ♡くちゅ♡ちゅうっ♡」

「ああん♡だめ、だめ♡おねがい♡遠藤くん♡それ以上しないで♡ほんとにへんになっっちゃう♡♡」

「イきそう？」

「イく♡イっちゃうの♡♡だから吸わないで♡クリトリスへんになるからあ♡♡」

「駄目です。ちゃんとクリトリスを鎮めないで、梨子さんが辛くなりますよ。ほら、イって」

ちゅうつ♡ちゅ、ちゅ♡ぢゅううう♡♡

「ひああああああつ♡♡イくうううつ♡♡」

耐えきれない快樂と共に嬌声をあげる。一瞬意識がどこか別のところに行つたようだった。ふわふわして、体が浮いているみたい。初めて達した快感に私は酔いしれた。

「あ……♡」

——私、どうなっちゃつたの？

「……いつたんだ、梨子さん。お疲れ様です」

柔らかい唇がそつと離れる。唇は離れたのに、アソコがとろとろに濡れているのが分かる。遠藤くんにクリトリスを吸われて、まるでふやけたみたいになつていた。びしょびしょだ。まるでお漏らししてしまつたみたい。

遠藤くんに見られてしまった——。今更羞恥心が湧いて咄嗟に顔を隠す。

「っ……ごめんなさい。幻滅、したでしょう」

「どうしてです？ 梨子さんはなにも悪いことなんてしてませんよ」

「だって……！ こんな、気持ち悪いの見せつけて……いじられていつちやうな  
んて……っ」

「そんなことはありません。クリトリスびくびく震わせていつてる梨子さん、すごく可愛かった」

ギョツと抱きしめられる。久しぶりにこんなことをしたからか、なんだかへんな気分だ。いつの間にかクリトリスの熱は治まっていたけれど、代わりに違う熱が頭にもやをかける。

これって……前戯よね？ もしかしてこのまま……。

なんとなく不安を覚える私に、遠藤くんは微笑む。

「大丈夫です。無理矢理はしません。付き合っているとはいえ、仮の関係ですから」

なんとなく、ほっとする。けれどどこかで残念に思う自分もいる。

遠藤くんとは付き合ったばかりだ。それに、恋愛感情があるわけじゃない。セックスするならちゃんときになつてからの方がいい。自分にとつても、彼にとつても。

ただ、遠藤くんは初めて私を受け入れてくれた人だ。できるなら……いい結果になればと思う。

「でも、今日みたいなことはしちゃうかも。梨子さんすごく可愛かったから」

「なっ……」

慌てる私に遠藤くんはクスクス笑う。

「これからよろしくお願いしますね」

甘い囁きにおずおずと頷く。恋愛経験の乏しい私は、三二歳らしいスマートな受け答えなんてできなかつた。遠藤くんの前で見栄を張っても無意味だと分かつたからかもしれない。

## 秘密の関係

翌日、会社で会った遠藤くんは驚くほどいつもと変わらなかった。

最初は、ひよつとしたら内心幻滅されているかもとか思ったけれど、いつもと同じようににこにこ笑ってくれて安心した。

ただ、いつもと同じすぎて夢でも見たんじゃないかとも思った。そんなわけないけど、あまりにも彼が変わらなすぎたからつい不安になる。

恋愛偏差値が低いせいだろうか。中高生の時みたいに顔に出るわけないのに。それから数日経っても、遠藤くんは変わらなかった。

「左京部長」

遠藤くんは普段と同じように呼ぶ。やましいことなど微塵も感じさせない態度。そつのない身のこなし。

特別連絡してくることもなければ、二人で出かけることもない。

——もしかして、あれはただ酔っ払って出来心でしてしまっただけ？

それはそれでなんだか寂しいけれど、秘密を知っている人間は一人でも少ない方が安心できる。だから私も放っておこうと思った。

その数日後の事だった。就業後、突然遠藤くんに声をかけられた。

「梨子さん、今日予定ありますか？ 一緒に食事でも行きませんか？」

私は驚いた。あれ以来にもなさすぎたから、本当に幻だったと思いかけていたところだった。

「え……？」

「食事です。もしかして、何か予定でもありますか？」

「そんなこと、ないけど……」

「よかった。梨子さんワイン好きでしたよね？ 美味しいお店つけたので、連れて行きたかったんです。いきますか？」

やっぱり、遠藤くんは全然普通だ。私の秘密のこと、気にしてないみたい。

どうやら飯のお付き合いはまだ続いているらしい。内心嫌われたわけじゃなかったんだとほっとした。

誘いに頷くと、遠藤くんは嬉しそうに笑った。私はあくまでも普通のお付き合いのスタートを予感していた。この時は。

———そんなわけなかった。

美味しい食事の後、ふらふらと街を歩く。遠藤くんが教えてくれたお店は料理もワインも美味しかった。そんなわけでちょっとだけ酔っていたし、気分も良かった。おかげで緊張も和らいでいた。

「梨子さん……いいですか」



私の手を、ふいに遠藤くんがギュッと握る。そして、彼の足が立ち止まった。その場所は、繁華街。もつと詳細にいうなら、ラブホテルの前だ。

「あの……遠藤くん……」

「梨子さんに触れたいんです」

ストレートな誘い文句についドキッとしてしまう。

「え、ええと……その……」

「梨子さんは嫌？」

「い……やではない、けど……」

まだ心の準備ができていない。遠藤くんを抱かれる準備。

「梨子さん、今ちよつと心配してるでしょう。大丈夫です。最後まではしませんか

ら」

「え？」

「僕は、梨子さんに自分の身体を好きになつて欲しいんです。だから、抱かなくても構いません。気持ちいいことを教えたいだけです」

以前、遠藤くんに触れられた時のことを思い出した。あの時はすごく気持ちよかつた。また、あんなふうにしてもらえるのだろうか。期待に胸が膨らむ。

「……わ、分かつたわ。それなら……いいわよ」

「よかつた。じゃあ、入りましようか」

ラブホテルに入るのは初めてだ。なにもかも遠藤くん任せつきりで、部屋も全部決めてもらつた。

部屋の中身は普通のホテルとはかなりちがう。内装も豪華だし、派手だ。しかも天井に鏡まであつた。初めてのラブホテルだからか、つい興奮してしまう。

「梨子さん、ラブホテル初めてなんですか？」

「えつ、あ……ごめんなさい。みつともないよね」

「いいえ、僕は嬉しいですよ。好きに見てまわってください。せつかく来たんですから」

遠藤くんは来たことがあるのかもしれない。そう言つて一人ベッドのふちに座つた。

——遠藤くんは落ち着いてるな。年上の私だけこんなにはしゃいで馬鹿みたい。しっかりしないといけないのに……。

途端に気持ちが冷めて、遠藤くんの横に腰掛ける。

「もういいんですか？」

「いいの。別にホテルはホテルなんだから」

「ふふ、さっきの梨子さん可愛かつたのに」

「なっ……」

ゆつくりと近付いた唇が軽くリップ音を立てながら私の唇に当たる。遠藤くんは唇はすぐに離れた。なんだか悪戯っぽい笑みを浮かべている。

「脱がせてもいいですか？」

「あ……」

やっぱり、そうなってしまうらしい。けれどここまで来てなにもせずに帰るのもへんだ。私は少し緊張しながら頷いた。

遠藤くんが私のスーツを脱がせていく。最初は上半身を。次は下半身を。下着だけ綺麗に残し、全て取り去った。

「梨子さん、可愛い下着ですね」

フリルのついた下着を見つめながら、彼がまじまじという。多分、少し意外に思ったのだろう。普段私が着ているスーツは可愛いものよりビシッと見えそうなクールなものばかり着ていたから。

私の下着は少し高めのブランドものだ。レースやフリルがふんだんにあしらわれ、色も見た目も華やかな作りになっている。けど私がこのブランドを買ったのは見た目が好みだからじゃない。

フリルのおかげでアソコの膨らみが目立たないからだ。男性ほど目に見えて顕著に勃起するわけではないが、それでも私にとってこのクリトリスは悩みの種だった。できるなら隠したい、目立ちたくない。

「へ、変……?」

「いいえ、とつても可愛いです。でも僕としては、一番可愛い部分を隠してしまうから勿体無いと思うんですけど」

「んっ……」

遠藤くんの指がクリトリスのあたりをチョンと、つつく。

「この下着だとクリトリスが目立たないから買ったんですか?」

「……よく分かったわね」

「僕の大好きな梨子さんのことですから。お見通しですよ。でも、ほんとうに隠せるのかな」

つん♥つん

「あつ♥遠藤くん、やめて♥」

「本当に隠せるのか確かめないと。梨子さん、会社で恥ずかしい思いますよ？」

「ふ、ん……♥ああ♥」

—— どうしよう、またクリトリス勃起しちゃう♥

遠藤くんに触れられたせいでクリトリスがどんどん大きくなっていくのが分かる。レースの部分がむくむくと立ち上がり、やがて少し突き上げたような形になった。

「……ああ、駄目だな。全然隠せてません。ホラ、梨子さん。見て。クリトリスがこんな目立つてる」

「いやあ……っ♥恥ずかしい……っ♥」

「ちゃんとした下着買わないと。みんなにクリトリス見られちゃいますよ」

そのまま下着の上からクリトリスをペロペロと舐め始めた。間接的に刺激されて、クリトリスがまた反応する。

「梨子さんのクリトリスは本当に敏感だなあ。そうだ、ちゃんとオナニーのやり方を教えないといけませんね。一人の時に勃起したら困りますから」

「少しだけ離れ、上から見下ろす。」

「梨子さん、自分でいじってみて」

「え……でも……」

「梨子さんならできますよ。ホラ、下着の上から触ってみてください」

言われるまま、私は恥ずかしさを堪え右手の指を下着の上に持ってきた。そのまま、立ち上がっているクリトリスにそつと触れる。

—— ああ、おつきくなってる♥遠藤くんに舐められたせいだわ♥

そのままくりくりと撫でると、力が強すぎたのか、ビクツと体が震えた。

こんなんじゃない。遠藤くんの方がずっと気持ちよかった……。もつと優しく、ゆっくりしないと。

「そう……上手ですよ。指の腹でそつと触れるんです。そのまま指で摘んだり、引つ張ったりして……」

「は……う♥あ、これ気持ちいい……♥」

「気持ちいいですか？ じゃあ、もう片方の手で胸をいじってみて」

遠藤くんが私のブラジャーの肩紐を下ろす。乳首の先端だけ見えるようなあられもない格好になった。私はそのまま、空いている左手で自分の胸を揉みしだく。



「梨子さんの胸、何カップですか。すぐくふわふわで柔らかいですね」

「E……、よ♥あんっ♥やだ、これ……」

「そのまま乳首をいじってみて。指でこねてみてください」

「こ……？ んあ♥あ♥気持ちいい♥」

指の刺激でどんどん乳首が硬くなってくる♥最初はフニフニだったのに、もう

カチコチになっちゃった♥こんなの勃起したクリトリスみたい♥

「遠藤く……♥どうしよう♥ち、くび……♥大きくなっちゃ……♥♥」

「ああ、そうですねえ。まるで梨子さんのクリトリスみたいだ。ひよつとして、

こういう体質なのかもしれませんね」

なんて、悠長に解説している。私は早く触って欲しくて、物足りなくて指をた

くさん動かした。でも、全然遠藤くんがするみたいにはならない。

「遠藤くん……っお願い、ココ……熱いの。あなたの指で触って……♥」

「ああ……梨子さん、なんて可愛いんだ。いいですよ。いっぱい触ってあげます。クリトリスたくさんシコシコして、勃起おちんちんでイキましようね♥」

下着を脱がせると、アソコからねつとりと糸が引いていた。むわんとした香りが漂ってくる。

「いやらしいおまんこですね……びしょ濡れじゃないですか。クリトリスオナニーでこんなに……」

「あ……ごめんなさい……♥」

「いいんですよ。梨子さんの練習のためですから。さあ、脚を開いて。僕にクリトリスがよく見えるようにしてください」

私は脚を広げ、遠藤くんに見えるようにクリトリスを差し出す。ピンク色の突起がひよっこり股の間から顔を覗かせている。

「可愛い梨子さんのおちんちん、吸ってあげますね」

ちゅう♡

「ひあっ♡」

遠藤くんの唇がクリトリスに吸い付いた。そのまま舌できつく吸引されると、腰が浮いて頭に火花が飛び散ったように意識が途切れ途切れになる。

遠藤くんの舌がクリトリスに吸い付いてる♡私のクリトリスちゅうちゅう吸ってる♡なんか出てきそう♡おまんこの奥がムズムズする♡

「いやあああっ♡♡遠藤く……っそれだめえっ♡強すぎ♡クリトリスおかしくなるっ♡またカチカチになっちゃう♡勃起するからあ♡♡」

「んむ♡ちゅう♡りこさんの、ちゅう♡勃起したクリトリスちんちん♡おいしいですよ♡こんなに膨らませて♡いやらしいですね♡ぢゆるっ♡♡」

「やだあ♡言わないでえ……恥ずかしいからあ♡あうっ♡♡ひああああ♡♡」

くちゅ♡ちゅるる♡ぐちゅ♡ちゅうううう♡

「あ……ひあ……♡イ、く♡イツチャうつ♡ぼつき、クリ……トリス……♡イ  
くう……♡ああ、……っ♡」

「クリトリス限界ですか？　ちゅうちゅう吸われてイツチャいそう？」

「イ、イクうつ♡イツチャう♡イクイクっ♡あたま変になるうう♡」

「いいですよ♡じゃあ、『りこのクリトリスちんちんイきたいです』って言うてく  
ださい」

「へあ……♡イ……いきたいです♡りこの、クリトリスちんちんイきたい♡イきた  
いのおっ♡んひいッ♡」

ぢゅうっ♡クチュ♡ぢゆるるるる♡

「ひあ、あ、あ、ッ♡♡♡だめええええっ♡♡イぐっ♡へんになるう♡♡  
ぢゆるる♡ちゅぽんっ♡

体からガクンと力が抜ける。だらしなく脚を開き、そのまま私は痙攣した。

——また、遠藤くんの口でいつちやった……あたま、おかしくなる……♡  
「梨子さん……上手にイけましたね♡クリトリススッキリしましたか？」

「あ……だめなの♡クリトリスムズムズしゆる……♡いったのに熱い……♡」  
「そっか……じゃあ、刺激が足らなかつたのかな？ もっとたくさんイきましようか」

「はひっ♡」

遠藤くんの指が私のおまんこを左右に広げて、クリトリスをきゅって剥き出しにする♡おつきくなつたクリトリス丸見えになつてる♡

「これからちよつとだけ痛いかもしれませんが、痛かつたら言つてください」  
人差し指がちゆく……♡とおまんこの中に挿し込まれた。初めての感覚に、奥が少しだけピリピリする。

「痛いですか？」

「いた……く、ない……大丈夫……」

「クリトリスと一緒におまんこも刺激します。そうしたら、もっと気持ちいいですよ」

ちゅぽっ♥ちゅぽっ♥指が出し入れされる。それと同時にまた口でクリトリスをちゅうちゅう吸われた。するとさつきまで奥でムズムズしていたものがだんだんとひどくなってくる。

「遠藤くんらめえ♥♥それ気持ちいい♥またへんになる♥」

「どんな感じですか？　ちゃんとやって」

「あっ♥♥クリトリスの先つちよがへんなの♥くすぐったくてかゆいの♥おまんこの奥もへん♥なんかでそう♥♥」

「かゆい？　じゃあ、掻いてあげないと」

クリっ♥と指先で引つ掛かれる。私は気持ち良すぎて思わず叫んでしまった。